

# ルートヴィヒ一世の外交と文化的業績

木野光司

## はじめに

大著『バイエルンのルートヴィヒ一世』を書いているゴルヴィッツァーによれば、1815年から1860年にかけてのヨーロッパの政治体制を「五頭政治」(Pentarchie)と見る考えが存在したようである<sup>(1)</sup>。それは、イギリス、フランス、ロシア、オーストリア、プロイセンによる五極からなる支配体制で、ここではバイエルンのような中規模国家が自らの存在を主張する余地は少なかった。19世紀のバイエルン王国が抱える問題はこの点にあった。バイエルン王国の初期体制を整えた大臣モンジュラは、すでに1793年にポーランド分割の例を挙げ、「中規模国(Mittelstaat)は覚悟を持って勇氣、精神力、儉約によって自らの運命を切り開くことを学ばなくてはならない。さもないと大きな魚に飲み込まれてしまう」<sup>(2)</sup>と警告していた。ナポレオンに「王国」へ格上げして貰っていたバイエルン、ヴェルテンベルク、ザクセンは、ウィーン体制期において「ドイツ連邦」内での脆弱な存在基盤を維持することに知恵を絞らざるを得なかった。

すでに拙論「ルートヴィヒ一世のバイエルン王国統治」においてルートヴィ

- 
- (1) Heinz Gollwitzer: Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz. Eine politische Biographie, S. 276 参照。(本書からの引用は Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz と略記する。本稿で引用する全文献の「発行所・発行年」については、末尾「参考文献」リストを参照されたい。)
- (2) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 275 参照。

ヒ一世の国内政策について論じた<sup>(3)</sup>。本稿ではルートヴィヒ一世の外交政策及び文化施設・歴史記念碑建設に焦点を当てて論じることとする。

## 第1章 ルートヴィヒ一世の外交

### 第1節 ドイツ連邦諸国との外交関係

#### 1. オーストリア帝国およびプロイセン王国との関係

1830年頃のドイツ連邦はオーストリア帝国宰相メッテルニヒが打ち出した政策が効果を挙げ、オーストリアの威光が輝いている時期であった。メッテルニヒは王子時代のルートヴィヒのリベラルな言動、ギリシアへの肩入れなどを嫌い、また彼を軽視していた。ルートヴィヒもメッテルニヒを嫌っていたが、強い威光を持つ大国の宰相に刃向かうことを避け、必要な時には彼に媚びることも厭わなかった。ルートヴィヒは、バイエルン貴族の利害を代表する親オーストリア派のヴレーデ元帥を側近として重用するなどして、オーストリアの機嫌を取り、国際問題でオーストリアの直接、間接の支援を引き出すことに努めた。1825年にルートヴィヒ一世（Ludwig der Erste, 25. 8. 1786 – 29. 2. 1868）が父の死を受けて王位に就いた頃は、オーストリア帝国の政治力はプロイセン王国よりも強かった<sup>(4)</sup>。

19世紀後半には上記両者の力関係に逆転が生じることになるが、ルートヴィヒの治世では、この両大国のヘゲモニーを求める戦いは未決着のままであった。バイエルンは、オーストリアともプロイセンとも婚姻政策を通じて姻戚関係を持っていた。ルートヴィヒの妹カロリーネ・アウグステ（Karoline Auguste）はヴェルテンベルク王太子ヴィルヘルムとの不幸な政略結婚を1814年に解消後、1816年にオーストリア皇帝フランツ一世に嫁いでいた。他

---

(3) 木野光司「ルートヴィヒ一世のバイエルン王国統治—1825年から1848年までの内政の考察—」参照。（本論文からの引用は「ルートヴィヒ一世のバイエルン王国統治」と略記する。）

(4) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 283 f. 参照。

方ルートヴィヒの異母妹エリーザベト (Elisabeth) は1819年に知り合っていたプロイセン王太子フリードリヒ・ヴィルヘルムに1823年に嫁いでいた<sup>(5)</sup>。ルートヴィヒはカロリーネ・アウグステを通してオーストリア皇帝と親密な関係を築いていた。他方プロイセンの義弟フリードリヒ・ヴィルヘルムとの関係も悪くなかったようである<sup>(6)</sup>。カトリック国家という点でオーストリアはバイエルンと近い関係にあった。他方、1834年に締結した「ドイツ関税同盟」(Der Deutsche Zollverein)の成功によって、プロイセン王国はバイエルン経済にとって重要なパートナーとなっていた。ルートヴィヒ一世は幸運にもその治世において重大な外交的決断を迫られることはなかった。

## 2. ヴュルテンベルク王国およびバーデン大公国との関係

ヴュルテンベルクの国王ヴィルヘルム一世とその大臣ヴァンゲンハイム男爵は、ドイツ両大国に対抗する「第三極」としての「南ドイツ連合」(Südbund)の結成をバイエルンに提唱したが、ルートヴィヒはバイエルンの独立を重んじ、隣国ヴュルテンベルクとの同盟に興味を示すことはなかった。ヴィルヘルム一世がバイエルンにとっても好都合な「関税同盟」(Zollverband)を提案し、1828年にそれが成立した時点が、両国が最も接近した時であったといえる<sup>(7)</sup>。ルートヴィヒは、両大国の影響を排した「第三極」の形成が困難であることを見抜くだけの現実的な目を持っていた。

バーデン大公国は、ナポレオン時代の1803年2月開催のレーゲンスブルク「帝国議会決議」(Reichsdeputationshauptschluß)により、ルートヴィヒ一世の父祖の地ライン右岸プファルツを自国の所領に編入していた<sup>(8)</sup>。ルート

(5) Martha Shad: Bayerns Königinnen, S. 34 参照。

(6) Hans Rall: Wittelsbacher Lebensbilder. Von Kaiser Ludwig bis zur Gegenwart. (本書からの引用は Wittelsbacher Lebensbilder と略記する。) 付録の家系図 Genealogie des Hauses Wittelsbacher 及び Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 642 参照。

(7) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 285 参照。

(8) Kathrin Ellwardt: Das Haus Baden in Vergangenheit und Gegenwart. S. 30 参照。

ヴィヒはプファルツをバーデンから取り戻すことに生涯こだわり続け、両国の関係が改善することはなかった。バイエルン王国の拡大を望まないプロイセンやロシアは縁戚のバーデン大公国の後ろ盾になり、領土交渉は全く進展しなかったのである<sup>(9)</sup>。

## 第2節 フランスに対する政策

ルートヴィヒ一世が、フランス最良の父親とは逆にフランスを敵視していたことはよく知られているが、バイエルン政府内には三種類の「親フランス」勢力が存在したという<sup>(10)</sup>。その一つは、先代の「ライン同盟」(Rheinbund)時代を懐かしむ官僚たちのグループであった。第二の非常に少数のグループは、復古したブルボン王家とのつながりを重視するグループであった。第三グループは、「7月王制」の市民王フィリップとそのリベラルな政治に共感を寄せる人々からなっていた。リベラルな大臣ツェントナー男爵(Zentner)やアルマンスベルク伯爵(Armansperg)などは第三のグループに属していた。

ルートヴィヒ自身は、1830年の「7月革命」を見て、革命と戦争への嫌悪を新たにしている<sup>(11)</sup>。他方、フランスで起こった革命がフランスのドイツ攻撃を妨げる要因になる点は評価している。逆に「ドイツ連邦」によるフランス攻撃については、アルザス地方をドイツに取り戻す利点があると考えていたが、そのためにバイエルン軍を出動させる気はなかった<sup>(12)</sup>。

ルートヴィヒ持ち前の頑固さが外交において功を奏した稀な例は、1830年代のルクセンブルク分割問題である。当時、プロイセンとオーストリアは、ワロン語圏をベルギーに割譲し、その代償に「ドイツ連邦」のリンブルクをオランダ王国に補償する案を容認しようとしていた。しかし、ルートヴィヒを筆頭に他の諸国がこの案に反対したことで、リンブルクを得るオランダ王国が新た

(9) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 287-298 参照。

(10) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 277-279 参照。

(11) ルートヴィヒ一世の「7月革命」に対する反応については、「ルートヴィヒ一世のバイエルン王国統治」184-187頁参照。

(12) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 279-281 参照。

に「ドイツ連邦」に加盟するという解決を達成した<sup>(13)</sup>。ルートヴィヒはさらに、新たに独立したベルギーもドイツ連邦に入れる「ドイツ連邦」強化策も主張したが、さすがにこれは実現しなかった<sup>(14)</sup>。

ルートヴィヒ政権末期の1848年2月にフランスで「2月革命」が起こるが、これはルートヴィヒ退位につながる混乱の時期にあたるので、第4章で少し触れることにする。

### 第3節 ギリシア王国への肩入れ

#### 1. ギリシア王オットーの誕生

ギリシア人がオスマントルコからの独立を求めて蜂起していた1820年頃、ヨーロッパの多くの国でヨーロッパの祖国ギリシア支援の気運が盛り上がっていた。王太子時代から古代ギリシア好きだったルートヴィヒは国王就任後に具体的な支援に動き出した。1830年2月3日、ロシア、イギリス、フランス三国が「ロンドン議定書」に基づきギリシア独立を宣言し、ロシアの大臣経験者カポディストリアス伯爵を暫定的な国家元首に任じていた<sup>(15)</sup>。三ヶ国はこの議定書に基づき、ギリシア王を出せるヨーロッパの名家を物色し、コーブルク家のレオポルトに目を付けたが、彼は1830年に成立した「ベルギー王国」国王になる道を選び取った<sup>(16)</sup>。

ルートヴィヒ一世がギリシア虜虜であることは知れ渡っていたので、今度はルートヴィヒの弟カールに打診がなされた。しかし、カールがその申し出を断ったので、ルートヴィヒはまだ15歳だった次男オットー（Otto, 1815-1867）を代わりに推薦した。各国の様々な思惑が交錯した結果、オットーをギリシア王にすることが決まり、1832年10月15日にギリシア国民議会代表団がミュンヘンでオットーに臣従の誓いを行った。11月1日にはバイエルンとギリ

(13) Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 301 f. 参照。

(14) Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 635 参照。

(15) Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 474 参照。

(16) 菊池良生『ドイツ三〇〇諸侯——一千年の興亡——』281-282 頁参照。

シアは同盟を結び、オットーの初代ギリシア国王就位が定まった<sup>(17)</sup>。同年12月にオットーと彼を支える摂政団（Regentschaftsrat）及び護衛隊はミュンヘンからギリシアに向けて出発した。摂政団は内務・財務・外務大臣を勤めていたアルマンスペルクを長とし、経験豊富なマウラー（Maurer）、アーベル（Abel）等で構成されていた<sup>(18)</sup>。

## 2. ギリシア王国を巡る混乱

オットーと摂政団が当時の首都ナウプリア（Nauplia）で着手した王国の運営は、最初から躓いた。英仏露はギリシア王国整備のために総額6000万フランを協調融資することを約束していたが、その支払いがなかなか実行されず、ルートヴィヒが一時しのぎの費用を立て替えることが続いた。摂政団は現地駐留の英仏露軍の意向を無視して国家建設を行うことは叶わなかった。また摂政団が英国派、フランス派に分裂する有様だった。肝心のギリシア人政治家たちも党派に分裂しており、また国家運営の知識を備えていなかった<sup>(19)</sup>。

1835年6月1日オットー一世は二十歳の成年に達した。英国本国からルートヴィヒへ強力な圧力がかけられた結果、1834年に摂政団内の英国派アルマンスペルクが生き残り、フランス派のアーベルとマウラーが摂政団から外されていた<sup>(20)</sup>。それ以後、アルマンスペルクが宰相（Erzkanzler）として政治の実権を握った。国王のオットーは無気力で決断力に乏しく、王の資質を欠いていた。1836年に才気煥発なオルデンプルク公女アマーリエと結婚してからは少し精神状態も安定するようになったが、持ち前の気質が大きく変わることはなかった。さらに大きな問題は跡継ぎが生まれないことであった<sup>(21)</sup>。

(17) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 475-477 参照。

(18) アルマンスペルク、マウラー、アーベルなどの官僚の活動については「ルートヴィヒ一世のバイエルン王国統治」171-187頁参照。

(19) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 480 f. 参照。

(20) ルートヴィヒは、次章で紹介する建築家クレンツェをギリシアに特使として派遣し、アーベルとマウラーの解任を命じた。Friedgund Freitag: Leo von Klenze. Der königliche Architekt, S. 102 参照。（本書からの引用は Leo von Klenze と略記する。）

(21) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 483-487 参照。

ルートヴィヒ自身も 1835 年から 36 年にかけて憧れのギリシアを訪れ、息子を励ましている。彼はギリシア王国を自分のように君主らしく統治することを息子に勧め、憲法制定の愚を戒めていた。しかし 1843 年の革命によりオットーは名前だけの君主となり、さらに 1844 年には憲法が制定された<sup>(22)</sup>。結局、1862 年の反乱によってオットー夫妻はギリシアから追放されてミュンヘンに戻り、その後バンベルクの「新宮殿」(Neue Residenz) に居を構える。オットーはその後もなく 1867 年に没することになる<sup>(23)</sup>。最終的にバイエルン王国にはギリシア融資の不良債権だけが残ることになる<sup>(24)</sup>。

以上のように、ルートヴィヒ一世の 22 年余りの治世は、先代マックス・ヨーゼフ一世の治世とは対照的に一度も戦争のない穏やかな時代であった。それ故、外交も「ドイツ連邦」という連合体内部での交渉が中心になり、王は国の存立を巡る決断を求められることもなかった。ルートヴィヒ一世の唯一の外交的冒険は次男のギリシア国王擁立であったが、それは 30 年間の苦闘の末にバイエルン王国にとっての失敗に終わった。

## 第 2 章 ルートヴィヒ一世の首都整備

ルートヴィヒ二世はノイシュヴァーンシュタイン城やヘレンキームゼー城を建造し、廃位された直後に謎の死を遂げたせいで、「悲劇の王」として多くの本に取り上げられてきた。しかし、彼の祖父であるルートヴィヒ一世は、首都ミュンヘンの改造、美術館や歴史記念碑の建造によって孫をはるかに凌ぐ文化的業績を残している。本章では、ルートヴィヒ一世の主な業績を取り上げる

---

(22) Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 489 参照。

(23) Sigmund Bonk, Peter Schmid (Hrsg.): *Königreich Bayern. Facetten bayrischer Geschichte 1806-1919*, S. 60 参照。(本書からの引用は *Königreich Bayern* と略記する。)

(24) Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 493 ff. 及び S. 732 ff. 参照。しかし、ゴルヴィッツァーは、このギリシャ支援が独立当初のギリシア王国の体制作りには有益であったと評価している。Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 481 及び S. 493 参照。

ことにする。

## 第1節 美術館の建設

ルートヴィヒ一世が主導して計画し、今も「ケーニヒ広場」(Königsplatz)周辺に残る美術館の建設計画についてはすでに別の論文で紹介した<sup>(25)</sup>。しかし、それらの完成は彼が国王となってからの業績になるので、本稿でも再度簡潔に取り上げることにする。

### 1. 「彫刻館」(Glyptothek) 建設

ルートヴィヒは1804年に赴いたイタリアで古代芸術に目覚めて以来、暇に任せてイタリア、ギリシアの古美術の入手に励んでいた<sup>(26)</sup>。またそれらを取藏展示する建物の構想もすでに1814年ぐらいから温めていた。ルートヴィヒは、彼のお気に入りの二人の芸術家に「彫刻館」の設計とデザインを依頼した。その一人はルートヴィヒが1816年に招聘して1818年に「宮廷建築監督」(Hofbauintendant)に取り立てたクレンツェ(Leo von Klenze, 1784-1864)で、もう一人はルートヴィヒのためにローマに長く滞在し、貴重な古美術品の収集に尽力したヴァーグナー(Johann Martin von Wagner, 1777-1858)であった<sup>(27)</sup>。ヴァーグナーはクレンツェと全く異なる美術観を持っていたし、いきなりミュンヘンに乗り込んできた新参者に反感を持っていたので、二人の共同作業がうまく運ぶことはなかった。ヴァーグナーは古代美術品を中心に据えた素朴なインテリアを提案していたが、クレンツェは彫刻の歴史を時代順に辿る展示方法と訪問者を圧倒する豪華な装飾を主張した。

決定権を持つルートヴィヒは豪壮な建築を好んだのでクレンツェの案を採用

---

(25) 木野光司「バイエルン王国初期のミュンヘン改造—1778年から1825年までの業績を中心に—」71-92頁参照。(本論文からの引用は「バイエルン王国初期のミュンヘン改造」と略記する。)

(26) 木野光司「ルートヴィヒ一世とバイエルン王国—第二代国王の少年時代から即位まで—」84-86頁参照。

(27) ヴァーグナーの伝記についてはLeo von Klenze, S. 43参照。



し、1816年4月に定礎式が行われた。その後も資金不足や設計変更が続き、ルートヴィヒが国王に即位した後の1830年ようやくこの建物は開館式を迎えた。しかし、完成した一階建ての「彫刻館」の評判は芳しくなかった。歴史的には、この建物はヨーロッパ初の独立した「彫刻美術館」と評価すべきものであったが、当時の人々には全く評価されなかった<sup>(28)</sup>。

## 2. 「絵画館」(Pinakothek) 建設

ルートヴィヒ一世の先々代の君主である選帝侯カール・テオドール(Karl Theodor, 1724-1799)が1779年に「選帝侯館」北側の庭園に画廊を設けて700点の絵画コレクションを市民に開放したのが、ミュンヘンの美術館の始まりである<sup>(29)</sup>。その後を継いだ初代国王マックス・ヨーゼフも伯父クリスティアン四世から譲り受けた1100点以上の絵画をミュンヘンへもたらした。また1803年2月にレーゲンスブルクでなされた「帝国議会決議」の後、バイエルン中の「修道院の世俗化」(Säkularisation)が進められた結果、修道院に飾られていた多くの絵画がミュンヘンにもたらされた<sup>(30)</sup>。1816年にクレンツェが王子ルートヴィヒに召し抱えられた時点では、8500点にまで膨らんでいた絵画コレクションを収蔵する施設の建築計画が議論されていた。とりわけ、既存の宮廷画廊を拡張する案と、王宮の横に作る広場に新たに美術館を建設する案の二つが有力であった。

ところが一つの事件がこの両案の問題点を明るみに出すことになった。長年の苦労の後、1818年10月にマックス・ヨーゼフの肝煎りで完成した王宮横の「国民劇場」(Nationaltheater)が、1823年1月14日夜の失火によりあ

---

(28) Leo von Klenze, S. 47 f. 参照。「彫刻館」も次に紹介する「絵画館」も第二次世界大戦の空襲で灰燼に帰した。戦後の再建の際には、大まかな外形のみが復元され、豪華な内装はシンプルなデザインに変更された。Leo von Klenze, S. 132-134 参照。

(29) カール・テオドールの文化政策については「バイエルン王国初期のミュンヘン改造」71-74頁参照。

(30) 木野光司「マックス・ヨーゼフ一世とバイエルン王国」82頁参照。

つけなく焼失した<sup>(31)</sup>。隣接する王宮は類焼を免れたが、この火事によって関係者一同は市街地に美術館を建設することの危なさを認識した。専門家たちが美術館にとって重要な採光等も考慮した結果、新たな美術館建設地として、王宮や市街地から離れた東西に延びる大通りが選ばれた。それは、建設工事が進められていた「彫刻館」北東に位置する広場であった<sup>(32)</sup>。

「彫刻館」(Glyptothek)の名に合わせて「絵画館」(Pinakothek)と命名された美術館の定礎式は、ルートヴィヒが王位に就いた翌春の1826年4月7日、ルネサンスの画家ラファエロの誕生日に行われ、彫刻館同様クレンツェの設計案による建設が始まった。ルネサンス様式で東西両翼150メートルの長さの建物は10年後の1836年に開館式を迎えた。建物の装飾などの工事にはなお数年を要し1842年に完成した<sup>(33)</sup>。

この「絵画館」は19世紀後半に建てられる多くの美術館のモデルとなった。有名な例を挙げると、1838年ロシア皇帝夫妻がミュンヘンに立ち寄った際、クレンツェ自らがニコライ一世を「彫刻館」と「絵画館」へ案内した結果、ニコライはペテルブルクに建設する美術館の設計をクレンツェに依頼することに決めた。1839年にペテルブルクを訪問したクレンツェは、ミュンヘンで職務を果たす傍ら「新エルミタージュ美術館」の設計やデザインの図面をペテルブルクへ送り続け、1842年の定礎式を経て1852年に完成した。クレンツェ自身も1851年にほぼ完成したエルミタージュ美術館を目にすることができた。ニコライ一世はクレンツェの功績を讃えて気前よく勲章と3万ルーブルの報奨金を与えた<sup>(34)</sup>。

さらに新たな絵画館である「新絵画館」(Neue Pinakothek)の定礎式が1846年10月12日に行われている<sup>(35)</sup>。この建物はゲルトナーの設計によつ

(31) 「バイエルン王国初期のミュンヘン改造」76-79頁参照。

(32) Leo von Klenze, S. 66 f. 参照。

(33) Leo von Klenze, S. 67 及び Karl Borromäus Murr: Ludwig I. Königtum der Widersprüche, S. 107 参照。(本書からの引用は Ludwig I. Königtum der Widersprüche と略記する。)

(34) Leo von Klenze, S. 71-75 参照。

(35) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 750 参照。

て始まったが、1847年4月21日にゲルトナーが脳溢血で急死したため、その後をフォイト (August Voit) が引き継ぎ、ルートヴィヒ退位後の1853年に完成した<sup>(36)</sup>。

ルートヴィヒ一世の60年に及ぶ美術品収集と美術館建設の熱意は、彼が1806年に7ヶ月パリに滞在した時の経験に由来しているとされる。ルートヴィヒは当時「ナポレオン美術館」(Musée Napoléon) と呼ばれていたルーブル美術館に33回以上通い、その展示を熱心に研究した。また当時パリで建てられていたマドレーヌ寺院などのアンピール様式の建築物にも圧倒されたそうである<sup>(37)</sup>。

## 第2節 王宮周辺の整備

### 1. 「オデオン広場」(Odeonsplatz) 整備

ルートヴィヒはすでに王子時代の1812年からミュンヘンの首都改造や文化施設の計画に深く関与するようになっていた。父親が政治に関与したがる息子の気を逸らせるためにとった措置であった。王子時代に着手した大きな仕事は、「シュヴァービング門」(Schwabinger Tor) の撤去とその跡地「オデオン広場」周辺の整備であった<sup>(38)</sup>。この事業もルートヴィヒのお気に入りのクレンツェが担うことになった。それ以前、1806年王国昇格時のミュンヘンは、市壁に囲まれた市街とその北東部に位置する「選帝侯館」からなる人口数万人の小都市であった。初代国王マックス・ヨーゼフの下で、市街地拡張の第一歩として「王宮」となった館と夏の別荘「ニュンフェンブルク城」を結ぶ東西幹線道路の整備と沿線の住宅整備の計画が立てられていた。ルートヴィヒが取り立てたクレンツェは、その計画の大幅な変更を提案し、ルートヴィヒの後ろ盾を利用して、王宮北部の都市計画に乗り出した。

---

<sup>(36)</sup> Ludwig I. Königtum der Widersprüche, S. 107 参照。

<sup>(37)</sup> Alois Schmid, Katharina Weigand (Hrsg.) : Schauplätze der Geschichte in Bayern, S. 315 参照。(本書からの引用は Schauplätze der Geschichte in Bayern と略記する。)

<sup>(38)</sup> 「バイエルン王国初期のミュンヘン改造」82頁参照。

手始めとして 1817 年に市壁の北口シュヴァーピング門と周辺の市壁を取り壊し、王宮の北西に新たな広場が作られた。その広場に面した一等地にルートヴィヒの義弟ボアルネ（＝ドイツ名ロイヒテンベルク公爵）が 250 室からなる豪壮な館を建てることを決め、クレンツェがその設計を引き受けた。その館（Leuchtenbergpalais）は 1821 年に完成し、1825 年にはマックス・ヨーゼフが、ボアルネの館とシンメトリーをなす形で「音楽堂」（Odeon）を建設するように命じた。1828 年にその音楽堂は完成した<sup>(39)</sup>。しかし、外観を重視しすぎた結果、その音楽堂は大勢の人が出入りするコンサートホールとしては欠陥のある造りになってしまった。それでも、新しい広場はこの音楽堂に因んで「オデオン広場」（Odeonsplatz）と命名された<sup>(40)</sup>。音楽堂が消滅してしまった現在もその名は残されている<sup>(41)</sup>。

## 2. 王宮の拡張

ルートヴィヒが 1825 年に王位に就いてまず着手したのが、王国の格式に相応しい「王宮」（Residenz）の建造であった。彼は 1824 年頃からクレンツェに「選帝侯館」の「王宮」への改築図を考案させていた。ルートヴィヒのたつての希望でフィレンツェのピッティ宮とルケライ宮の折衷的外観が採用された。翌 1826 年 6 月 18 日、「ワーテルローの戦い」戦勝記念日に定礎式が行われた。一階は、市民が見学できるホールや家政一般の部屋、二階は王一家の居室と賓客の応接間、三階は祝宴用広間という構想であった。ルートヴィヒ一世の様々な要望を取り入れた「新王宮」（Königsbau）は 1835 年秋、王夫妻の銀婚式の年に入居可能になった。

ルートヴィヒ一世は次に王宮敷地内に「宮廷教会」（Hofkirche）を設けることをクレンツェに求めた。ルートヴィヒは 1823 年にシチリアのパレルモで

(39) 「バイエルン王国初期のミュンヘン改造」83 頁参照。

(40) Leo von Klenze, S. 36-39 参照。クレンツェはオデオン広場の西側に「ヴィッテルスバッハ広場」（Wittelsbacherplatz）も作っている。

(41) 「音楽堂」は第二次世界大戦の爆撃により廃墟となり、1954 年に異なる外観で復元されて以来「バイエルン内務省」となっている。Leo von Klenze, S. 132 参照。

ビザンツ様式の教会「カペラ・パラティーナ」(capella palatina)を訪れ、それに魅せられていた。彼は同様式の教会を建てるようクレンツェに命じたが、クレンツェは粘り強い説得によってその無謀な計画を変えさせ、1842年に「宮廷教会」(Allerheiligenhofkirche)を完成した<sup>(42)</sup>。

さらに王家に相応しい「玉座の間」や「祝典の間」を収める新棟の建築も行った。ルートヴィヒ一世はローマのルネサンス様式宮殿を強く望んだが、クレンツェは王の希望を取り入れつつもミュンヘンの気候や費用を考慮した現実的な建物を設計していった。1832年に定礎式が行われ、1842年王太子マクシミリアン(Maximilian)とプロイセン王女マリー(Marie)の結婚式の時に「祝典の間」(Festsaal)の落成を祝った。その後も20年かけてインテリアなどの整備が行われた。

### 第3節 ルートヴィヒ通り整備

現在のミュンヘン市街の軸をなすのは、旧市街から北北西に伸びるルートヴィヒ通りである。ルートヴィヒはこの通りを二人の建築家に設計させた。その結果、通りの南部分と北部分では異なる建築様式が採用されることになった。

#### 1. クレンツェによる南側の整備

クレンツェが、オデオン広場を起点として北に延びる通りを提案し、この通りは1822年に「ルートヴィヒ通り」(Ludwigstraße)と命名された。上述のようにクレンツェはオデオン広場にロイヒテンベルク館、音楽堂を建てたが、1828年その北側にロイヒテンベルク館を凌ぐ「マックス公爵館」(Herzog-Max-Palais)も建てた。それはダンスホール、乗馬施設までも備える広大な建物になった。これらの館のモデルはローマのファルネーゼ宮(Palazzo Farnese)であった<sup>(43)</sup>。ルートヴィヒはクレンツェを伴って1818年と1823年に

(42) Leo von Klenze, S. 58-60 参照。

(43) Leo von Klenze, S. 36 参照。1837年このマックス公爵邸で、後にオーストリアノ

ローマ、フィレンツェを訪れ、建築様式の研究を行っていた。王はルネサンス様式を模倣した建物を望んだが、クレンツェはイタリア建築の安易な模倣に反対し続けた。

ルートヴィヒは自分の名を冠した通りをイタリア・ルネサンス風の館で統一することを望んだが、ここに屋敷を構える富裕市民たちは非実用的な贅沢を望まなかった。クレンツェは王の望みと建築主の要求の葛藤に苦しめられたが、大通りに面した複数の住居ごとに統一的ファサードを付ける解決策を考案することでこの難問を解決した。

その後、ルートヴィヒがこの通りを当初計画の三倍の長さに延長することを決めた。彼は国王の権限を利用し、ミュンヘン市と国の財政を投入して、延長される通りの両側に公的施設を建設することにした。クレンツェが設計して1827年に建てた「戦争省」(Kriegsministerium)がその最初のものであった。しかし、これがクレンツェがルートヴィヒ通りで設計した最後の建物になった<sup>(44)</sup>。

## 2. ゲルトナーによる北側の整備

ルートヴィヒ一世は、1827年頃クレンツェに代わる最良の建築家を見いだしていた。その人物は、クレンツェ採用のために早期退職を強要された建築監督アンドレアス・ゲルトナーの息子フリードリヒ・ゲルトナー (Friedrich von Gärtner, 1791-1847) であった。本章第1節で紹介したヴァーグナーの推薦もあって、王は延伸することにしたルートヴィヒ通りの公的施設をゲルトナーに委ねた。その最初の建物が1843年に完成し、現在も復元されて残る

---

↳ 皇后になるエリーザベトが生まれている。1938年ヒトラーが道路拡張のためにこの館を取り壊した。現在その跡地にはドイツ連邦銀行バイエルン支店が置かれている。Wittelsbacher Lebensbilder, S. 415 参照。

(44) クレンツェがミュンヘンに建てた彫刻館、絵画館、オデオン、新王宮は、すべて第二次大戦の空襲によって破壊され、戦後取り壊されたそうである。戦後再建された建物の一部にオリジナルを模した形が復元されて現在に至っている。Leo von Klenze, S. 131-134 参照。

「国立図書館」(Hof-und Staatsbibliothek)であった。

さらに1829年8月25日、ルートヴィヒ43歳の誕生日に図書館の北の広場で「ルートヴィヒ教会」(Sankt Ludwig)の定礎式が執り行われた。ゲルトナーは王の希望するビザンツ様式を取り入れ、1844年9月8日に落成式を迎えた。ゲルトナーは教会の北側に建設される「ミュンヘン大学」(Ludwig-Maximilians-Universität)の建物も設計し、それは1833年8月25日の定礎式を経て、1840年に完成した<sup>(45)</sup>。ゲルトナーがルートヴィヒ通りの終点を飾るものとして設計した「凱旋門」(Siegestor)は、彼の死後の1852年に完成した<sup>(46)</sup>。

1834年に「クレンツェがバイエルンでの芸術分野の決定権を握っている」というクレンツェを誹謗する新聞報道が出て後、ルートヴィヒはクレンツェを一層遠ざけるようになっていた<sup>(47)</sup>。ルートヴィヒが1835年に次男オットーの治めるギリシア王国を訪問した時にも、王はクレンツェではなくゲルトナーを同行させ、アテネ王宮の設計も彼に委ねた<sup>(48)</sup>。

### 第3章 バイエルン各地の歴史記念碑建造

ルートヴィヒ一世はミュンヘンの整備と並行して、ドイツ・ナショナリズムに訴える歴史記念碑も多く建立している。その代表的なもの三つを紹介しよう。

#### 第1節 「ヴァルハラ」(Walhalla)の建設

若きルートヴィヒは、1807年1月ベルリンで有名な彫刻家シャドウ(Johann Gottfried Schadow)のアトリエを訪問した時、ドイツ人を顕彰する建

---

(45) Universitätsarchiv München: Ludwig-Maximilians-Universität München, S. 62 f. 参照。

(46) Ludwig I. Königtum der Widersprüche, S. 108 参照。

(47) Leo von Klenze, S. 109 f. 参照。

(48) Leo von Klenze, S. 62 参照。

物の構想をシャードウに打ち明け、最初の胸像 11 体を発注していた。同年 8 月ベルリンで尊敬するスイスの歴史家ミュラー（**Johannes von Müller**）とも出会い、その建物を「ヴァルハラ」と命名するようという提言も貰っていた<sup>(49)</sup>。この事実から、ルートヴィヒ一世は 20 歳の頃からドイツ・ナショナリズムを称揚する記念碑の建設に熱意を燃やしていたことが伺える。

ミュンヘン「国民劇場」を設計したフィッシャー（**Fischer**）が 1810 年に提案していたドーリア式宮殿がヴァルハラの基本案に採用され、1815 年にコンペティションも行われた。しかし、ルートヴィヒは 1816 年に招聘したクレンツェが 1819 年になって提案した円形宮殿を審査委員会の反対を押し切って採用した。しかし、1820 年になると王子はまた考えを変え、ローマのパンテオン風にするように求めた。ルートヴィヒの気まぐれによる混乱の後、結局は元のドーリア式宮殿案に落ち着いた<sup>(50)</sup>。

1820 年代にヴァルハラ建設用の石材の切り出しや、そこに飾られる偉人の胸像の制作が進められた。一方で肝心の建設地の決定にも時間を要した。時にはミュンヘン郊外のテレージエン広場案も出るなどの紛糾の後、1929 年によくレーゲンスブルク郊外「ドーナウシュタウフのブロイバルク」（**Bräuberg bei Donaustauf**）での建設が確定した。人里離れた丘陵が選ばれた理由は、当時荒廃していたギリシア神殿を調査し、ヴァルハラ的设计案公募にも応じていた考古学者ハラー（**Carl Haller von Hallerstein**）が描いたギリシア神殿の図案が、ルートヴィヒ一世に強い印象を与えたからとされる<sup>(51)</sup>。

1830 年 10 月 18 日、「諸国民戦争」（**Völkerschlacht bei Leipzig**）の戦勝記念日に 3 万人の来賓を迎えて定礎式が挙行された。クレンツェはこの建物を単なる有名人の胸像の展示場とは考えていなかった。地下室に「期待のホール」（**Halle der Erwartung**）を設けて、優れた同時代人の胸像を保存し、そ

(49) 「バイエルン王国初期のミュンヘン改造」85 頁及び **Schauplätze der Geschichte in Bayern, S. 311 f.** 参照。

(50) **Leo von Klenze, S. 76 f.** 参照。

(51) **Schauplätze der Geschichte in Bayern, S. 317-319** 参照。



の人の死後に荘厳な形で胸像をメインホールへ祀る儀式を繰り返すことによって、ヴァルハラをドイツ民族の英雄の神殿たらしめようと考えていた。しかし、当初この構想に賛成していたルートヴィヒ一世は、神殿に祀られる人と祀られぬ人が出た場合に生じる外交的問題を恐れ、1835年に「期待のホール」建設の中止を命じた。また1837年夏にヴァルハラを見学したメッテルニヒは、人里離れた山に彫像を飾るだけの建物に巨費を支出する企てを批判した<sup>(52)</sup>。

1842年10月18日に落成式が行われたが、定礎式の時の華やかさとは対照的に招待客だけが見守る家庭的儀式の様相を見せたようである<sup>(53)</sup>。落成式の時点で、92体の偉人の胸像と64枚の銘板が飾られていた<sup>(54)</sup>。35年の歳月と400万グルデンの建設費をかけたこの奇妙な建物はルートヴィヒ一世の記念碑建築を代表するものとなった<sup>(55)</sup>。またクレンツェの夢は十全に実現されなかったが、彼がミュンヘンに建てた美術館や王宮とは異なり、ヴァルハラだけは第二次大戦の空襲を免れて、彼の芸術をそのまま現在に伝えている<sup>(56)</sup>。ここには現在、ナチズムに抵抗して処刑されたゾフィ・シオルの胸像なども飾られている<sup>(57)</sup>。

## 第2節 「栄誉の広間」(Ruhmeshalle)の建設

ルートヴィヒは王太子時代の1809年頃から「バイエルンの英雄」を祀る施

---

<sup>(52)</sup> Königreich Bayern, S. 49 参照。

<sup>(53)</sup> Leo von Klenze, S. 78-81 参照。完成にはなお時間を要したようで、ヴァルハラの大理石の床のプレートには「1852年1月完成」と書かれている。

<sup>(54)</sup> 肖像のない歴史上の人物には銘板が利用された。Staatliches Bauamt Regensburg: Walhalla. Amtlicher Führer, S. 4 参照。(本書からの引用はWalhalla. Amtlicher Führer と略記する。)

<sup>(55)</sup> Ludwig I. Königtum der Widersprüche, S. 110 参照。

<sup>(56)</sup> Schauplätze der Geschichte in Bayern, S. 326 参照。

<sup>(57)</sup> 2014年版の公式ガイドによれば、5～7年ごとに新規の胸像の検討ながざされて、2014年時点で130体の彫像と64枚の銘板が展示されている。シオルの胸像は彼女の60年目の命日2003年2月22日に飾られた。Walhalla. Amtlicher Führer, S. 4-10 及び S. 66 参照。

設の構想も抱いていた。建設場所をテレージエン広場横の高台と決め、1833年に複数の建築家に設計案を出させるコンペティションを行った。その結果、1834年にクレンツェが提案した巨大なババリア像とコの字型のドーリア式ホール案が採用された。彫刻家シュヴァンターラー (Ludwig von Schwantthaler) がその像のデザインを担当し、シュティグルマイアーとミラーがそのブロンズ像の鑄造を担当した<sup>(58)</sup>。

1843年に「栄誉の広間」(Ruhmeshalle)と命名される施設の建設が始まり、1853年に完成した。ババリア像はそれより早く1850年10月19日、ルートヴィヒ一世即位25周年記念日に公開されていた。この間、1848年3月にルートヴィヒ一世が退位する事件もあり、当初バイエルンの英雄200人の胸像を祀るはずだった広間には、結局74体の胸像が飾られたらしい。その中には王に尽したクレンツェの像も含まれていた<sup>(59)</sup>。

### 第3節 ケルハイム「解放の広間」(Befreiungshalle in Kelheim)の建設

ドイツ諸国のナポレオンからの解放を讃える記念堂建設は、クレンツェの次の寵児ゲルトナーに託された。1836年、ルートヴィヒは初めてのギリシア訪問にゲルトナーを伴っていたが、その旅の途上ギリシアの廢墟でこの構想を抱き、ゲルトナーに設計案を依頼したらしい<sup>(60)</sup>。ルートヴィヒは、彼の肝煎りで作られていた「ドーナウ・マイン運河」沿岸で、遠くからも記念堂が望める適地として1838年にケルハイムの山(Michelsberg)を建設地と決めていた。

「解放の広間」の定礎式は、地理的に近いヴァルハラ落成式翌日、1842年10月19日に行われた。10月19日は「諸国民戦争」勝利の記念日であるだけでなく、ルートヴィヒ一世即位の日でもあった。記念堂を飾る勝利の女神34体のデザインはババリア像で王の評価を得たシュヴァンターラーが担当し、建

<sup>(58)</sup> Leo von Klenze, S. 81-83 参照。

<sup>(59)</sup> Leo von Klenze, S. 82 f. 参照。

<sup>(60)</sup> Manfred F. Fischer: Befreiungshalle in Kelheim. Amtlicher Führer, S. 3 参照。  
(本書からの引用は Befreiungshalle in Kelheim. Amtlicher Führer と略記する。)

物の建築はゲルトナーが進めた。

ところが上述の通り、ゲルトナーが1847年4月に脳溢血で急死した。ルートヴィヒ一世は他に才能ある建築家を見つけられず、冷遇してきたクレンツェに依頼した。クレンツェはゲルトナーの設計案に批判的だったし、自分を蹴落としたライバルの仕事を継ぐ気もなかったので、承諾を渋った。ルートヴィヒはそれを見て、完成済みの基礎部分を活用することを条件にクレンツェが新たに設計をすることを認めた。クレンツェはすぐに仕事に取りかかり、彼には珍しく古典主義的記念碑の図面を書いた。1847年11月には新しい図案での建造が始められた。

しかし、1848年3月「ローラ・モンテス事件」でルートヴィヒが退位するという事件が起こる。これにより「解放の広間」建設計画も水泡に帰したと思われた。ところが、ルートヴィヒは退位後2ヶ月もたたないうちにこの記念碑建設の継続を決意する。国王時代の半額に減額された王室費（Zivilliste）50万グルデンを投じて事業を継続したのである<sup>(61)</sup>。クレンツェは建設予算を半分に減らし、高価な天然資材を割安な煉瓦に変えるなどして新たな設計を行った。1848年11月には2体のヴィクトリア像を完成したところでシュヴァンターラーが没し、その弟子たちが後を継いだ<sup>(62)</sup>。クレンツェは、当初記念碑内部に計画されていた18体のヴィクトリア像を大きくして外壁に設置する変更も行った。1850年春から建設工事が再開され「諸国民戦争」50周年記念の1863年10月18日に落成式が行われた。数々の困難を乗り越えて完成した記念碑を見学した77歳のルートヴィヒはその出来映えに感動し、同行した80歳のクレンツェに握手を求めた。これは、身分の上下に厳しいルートヴィヒがクレンツェに対して示した初めての率直な感謝の印であったという<sup>(63)</sup>。

---

(61) Leo von Klenze, S. 118 ff. 参照。公式ガイドブックによれば、総工費は250万マルクだった。Befreiungshalle in Kelheim. Amtlicher Führer, S. 19 参照。

(62) Befreiungshalle in Kelheim. Amtlicher Führer, S. 17 参照。

(63) Leo von Klenze, S. 87 f. 参照。

#### 第4節 その他の文化的事業

ルートヴィヒ一世が建てた記念碑は他にもある。ここでその詳細に立ち入る紙幅はないが、記念碑の所在と名前だけを建設順に挙げておく。1833年、クレンツェの設計で「カロリーネ広場」(Karolinenplatz)に、1812年の「ロシア遠征」戦没者名を刻んだ「オベリスク」(Obelisk)が立てられた。1841年から1844年にかけて、ゲルトナーの設計でオデオン広場に「司令官の広間」(Feldherrnhalle)が立てられた。ルートヴィヒ一世退位後の1850年、夫妻の棺を納める「聖ボニファティウス教会堂」(Sankt Bonifaz)及び付属「ベネディクト修道院」がツィープラントの設計で完成している<sup>(64)</sup>。さらに1862年、クレンツェが設計した「プロピュライオン」(Propyläen)がケーニヒ広場に建立されている<sup>(65)</sup>。

別稿で述べたように、ルートヴィヒ一世は19世紀前半のドイツ・カトリック守護者の第一人者の役割を演じていた<sup>(66)</sup>。そのため、ルートヴィヒは1842年からケルン大聖堂完成まで退位後も毎年多額の献金を行った<sup>(67)</sup>。またレーゲンスブルク大聖堂とバンベルク大聖堂の修復にも尽力した。シュパイアー大聖堂のフレスコ画の修復にも援助を行っている。ルートヴィヒが遺した「芸術品関係支出帳」を集計した結果、公金の支出を除いて彼が生涯に支出した額は1100万~1800万グルデンにのぼるそうである<sup>(68)</sup>。

ゴルヴィッツァーによれば、ルートヴィヒ一世が美術館などの文化施設建造によって目指したのは、国民の人間性の向上であり、上記のような歴史的記念碑の建設によって目指したのは、ドイツ人の愛国心の向上であった<sup>(69)</sup>。本稿

(64) Wittelsbacher Lebensbilder, S. 202-211 参照。

(65) Ludwig I. Königtum der Widersprüche, S. 107 及び Königreich Bayern, S. 54 f. 参照。

(66) 「ルートヴィヒ一世のバイエルン王国統治」187-189 頁参照。

(67) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 651 参照。

(68) Bayerische Staatsbibliothek: Ludwig I. von Bayern. Der königliche Mäzen. Ausstellungskatalog, S. 13 参照。(本書からの引用は Ludwig I. von Bayern. Der königliche Mäzen と略記する。)

(69) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 750 f. 参照。

の冒頭で確認したように、バイエルン王国には大国になる可能性は閉ざされていた。ルートヴィヒ一世は多くの人間的欠陥と時代遅れの偏見にとらわれていたが、彼が文化的な首都ミュンヘンの建設を目標としたことは賢明であったと言えるだろう。

## 第4章 ローラ・モンテス事件と退位

### 第1節 躓きの石ローラ・モンテス

ゴルヴィッツァーは、「ローラ・モンテス事件」(Lola-Affäre)を、老人が貪欲な女の色香に惑わされた「悲劇」であると断じている<sup>(70)</sup>。ルートヴィヒにローラ(Lola Montez, 本名 Maria Dolores Elisa Gilbert, 1818?-1861)を紹介したのは、ルートヴィヒが青年時代に知り合い、バイエルン軍の将校や侍従に取り立てていた道楽者マルツァーン男爵(Maltzahn)だった。ローラが1846年10月5日にミュンヘンを訪れ、身分証明書すら持たぬ身で宮廷劇場での舞踊を申請し、その翌日10月7日に国王と面会できたのは、マルツァーンの根回しがあつてのことらしい。そしてルートヴィヒは一目でローラに魅了されてしまった。王は「美人画廊」(Schönheitengalerie)にローラの肖像画を加えることを命じ、画家のシュティラー(Stieler)の前でポーズを取るローラとの交際を深めていった<sup>(71)</sup>。

ルートヴィヒはそれ以前にも多くの愛人を持っていたが、今回の国王の寵愛はかつてないものであった。ルートヴィヒは身元不詳の踊り子のために警察長官の左遷をもくろみ、貴族の称号を与えようとした。内務大臣アーベルの忠告によって、前者は断念したが、1847年2月にローラに強引に市民権を与えた。それを見たアーベルは大臣たちの総意をとりまとめ、全大臣を罷免してまでローラを取るか否かを王に迫ったが、2月13日王は大臣たちを罷免する方

(70) Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 668 参照。

(71) ローラの肖像画と伝記については Gerhard Hojer: *Die Schönheitengalerie König Ludwigs I.*, S. 116 f. 参照。

を選んだ。

1847年春から夏にかけてミュンヘン市民はローラへの反感を募らせていった。上層市民階級もローラを社交界に入れることを拒絶した。ローラの実在は、ルートヴィヒ一世から有能な部下と友人たちを遠ざけていった<sup>(72)</sup>。出世を望むご機嫌取りだけが王の周りに残った。ローラはルートヴィヒに男爵ではなく伯爵位をねだって、同年8月25日に「ランズフェルト伯爵夫人」(Gräfin Landsfeld)にして貰い、ますます人々の矚撃を買った。アーベルの後、大臣代理の職に就いていたマウラーもこれを批判して同年11月30日に左遷される。その後釜にはかつて左遷されていたヴァラーシュタイン(Wallerstein)が返り咲いた。ヴァラーシュタインは密かに英国でローラの身元調査を行うなど、来たるべきローラ追放に向けた準備を進め、ルートヴィヒとローラに媚びて「大臣代理」(Ministerverweser)に取り立てられていたベルクス(Berks)も取り込むことで、外堀を埋めていった<sup>(73)</sup>。

## 第2節 ルートヴィヒ一世の退位

### 1. ローラ・モンテス追放

ローラは1847年からミュンヘン大学の学生団体「アレマニア団」(Korps Alemannia)を自分の取り巻きに仕立て上げていたため、ローラを嫌悪する学生たちとアレマニア団の諍いが耐えなかった<sup>(74)</sup>。1848年2月9日、大学生たちが路上で抗議行動に出たことを知った王は、大学の半年間の閉鎖、ミュンヘン外から来ている学生の大学再開までの退去の命令を発した<sup>(75)</sup>。この知らせを聞いた市民たちが憤激し、すぐに市庁舎で集会を開いた後、王との面会を求めて王宮前に押し寄せた。夜になってベルクスは、4月には大学を再開す

(72) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 682 参照。

(73) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 684 f. 参照。

(74) Wilhelm J. Wagner: Bayern. Zwei Jahrhunderte bayerische Geschichte, S. 55 参照。(本書からの引用は Bayern. Zwei Jahrhunderte bayerische Geschichte と略記する。)

(75) Königreich Bayern, S. 70 及び Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 685 f. 参照。

ると告げたが、市民たちはもはやそれには満足しなかった。2月11日に再び市民や学生の集会が開かれ、大学の即時再開とローラ・モンテスの国外追放を要求した。

ルートヴィヒのローラへの妄執は全く衰えていなかったが、王は市民たちの要求に応じざるを得なかった。というのも、治安を守る「国土防衛隊」(Landwehr)の隊長が市民弾圧に乗り出すことを拒み、ミュンヘン近郊の軍隊もローラの館の防衛に出動することを拒んだからであった。すでに2月11日のうちに、市民たちに大学の即刻の再開とローラ追放の決定が伝えられた<sup>(76)</sup>。ルートヴィヒがローラにあてがっていた館は3月に市民たちによって破壊された。愚かなルートヴィヒは、自分がローラに騙されていたことを後に明瞭に証明されるまで彼女に貢ぎ続けたそうである。

## 2. ルートヴィヒ一世退位

ルートヴィヒ一世は「ローラ・モンテス事件」によって退位に追い込まれたと思われがちだが、ゴルヴィッツァーによれば、両者は直接はつながっていないそうである。ただ、ローラ事件で地に落ちたルートヴィヒ一世の評判と気力の衰えが、パリから伝わってきた「2月革命」勃発の知らせと相まって王を退位へ突き動かしたと言えるようである<sup>(77)</sup>。

具体的には、ローラ追放後も大臣代理の地位に留まっていたベルクスに対する抗議運動が3月2日に始まり、翌日ベルクスは辞任を強いられた。一部の市民と大学生たちは3月4日から連日市庁舎前で集会を開き、4日には兵器庫から武器も持ちだしていた。この事態を耳にした王太子マクシミリアンは、王太子の館があるヴェルツブルクからミュンヘンへ急いだ。この時、王の周囲ではカール・ヴレーデが軍隊による鎮圧を提言するなど、市民に対する対処法を巡る混乱が生じたが、3月6日に市民に人気のあった王の弟カールが市民代表たちの所に向向いて3月16日に「身分議会」を開催することを告知したこ

(76) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 686-688 参照。

(77) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 706 参照。

とで、事態は沈静化した。

3月4、5日に議会の長や大臣たちの説得が功を奏して、3月6日ルートヴィヒ一世は大臣ヴァラーシュタインが起草した「宣言書」を發布した。それには、議会の開催、憲法に則った大臣への権限委譲、完全な出版の自由、選挙制度の改革、裁判制度の民主化、国家公務員の待遇改善、ユダヤ人の待遇改善などの改革案が記されていた<sup>(78)</sup>。この宣言の発表にミュンヘン市民は喜び、7日には市街の至る所にバイエルン国旗が飾られた。

他方、この宣言には地方の諸問題の解決についてはひと言も触れられていなかった。そのため、フランケンとシュヴァーベンで農民たちの暴動が起こった。3月17日にはシュヴァーベンの代表73名が、開催された「議会」に要求書を持参した。プファルツ、フランケン、シュヴァーベンの民衆は、ナポレオン支配下ですでに民主体制を経験していたため、彼らの要求の方が過激なものになっていた<sup>(79)</sup>。身分議会で「農民解放」が決定されてようやく各地の不満は収まったようである。

3月6日以来、己れの意に反する決定や宣言を出さなくてはならなかったルートヴィヒは、すべての責任を大臣ヴァラーシュタイン侯爵になすりつけ、憂さ晴らしに3月11日彼を二度目の罷免にした。その頃ローラがミュンヘンに舞い戻っているという噂が広がり、大臣たちは王がローラに与えていた市民権を抹消しようとしていた。ルートヴィヒは自分の承諾もなく物事が決められるのを見て、3月18日に「退位」(abdanken)という言葉をも口にしたりし<sup>(80)</sup>。

バイエルン王国には「国王退位」の規定は存在しなかった。ルートヴィヒは長男マクシミリアンと退位後の財産配分などの問題を相談し、3月19日午後には王族4人の成人男子を集めて「退位」の意向を伝えた。翌20日にルートヴ

(78) Königreich Bayern, S. 71 及び Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 711 参照。

(79) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 713 f. 参照。

(80) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 716 f. 参照。



イヒ自らが国民に宛てた「退位文書」に署名し、退位を公表した<sup>(81)</sup>。

ルートヴィヒはマクシミリアンと契約書を交わし、50万グルデンの年金、複数の城の無料使用权、そして建設中の記念碑などの完成の保証を取り付けた<sup>(82)</sup>。ルートヴィヒは退位後も王宮に住んだが、新王の執務にうさく口出しをした。マクシミリアンは父親の介入に閉口し、退位後の住居と決められていた「ヴィッテルスバッハ宮殿」(Wittesbacher Palais)に移ることを1849年父に命じた<sup>(83)</sup>。

1848年3月より第三代国王マクシミリアン二世(Maximilian II. Joseph, 1811-1864)の治世が始まるが、ルートヴィヒはこの新王よりも長生きし、1868年2月29日に逗留中のニースで81年の生涯を閉じることになる。

#### 参考文献

- \*Bayerische Staatsbibliothek: Ludwig I. von Bayern. Der königliche Mäzen. Ausstellungskatalog (Bayerische Staatsbibliothek 1986)
- \*Bonk, Sigmund/Schmid, Peter (Hrsg.): Königreich Bayern. Facetten bayerischer Geschichte 1806-1919. (Verlag Friedrich Pustet 2005)
- \*Ellwardt, Kathrin: Das Haus Baden in Vergangenheit und Gegenwart. (Börsche-Verlag 2015)
- \*Fischer, Manfred F.: Befreiungshalle in Kelheim. Amtlicher Führer (Bayerische Verwaltung der staatlichen Schlösser, Gärten und Seen 1994)
- \*Freitag, Friedgund: Leo von Klenze. Der königliche Architekt. (Verlag Friedrich Pustet 2013)
- \*Gollwitzer, Heinz: Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz. Eine politische Biographie. (Ludwig Verlag in der Südwest Verlag 1997)
- \*Hojer, Gerhard: Die Schönheitengalerie König Ludwigs I. (Verlag Schnell & Steiner 2011<sup>7</sup> (1979<sup>1</sup>))
- \*Murr, Karl Borromäus: Ludwig I. Königtum der Widersprüche. (Verlag Friedrich Pustet 2012)

---

(81) Bayern. Zwei Jahrhunderte bayerische Geschichte, S. 56 及び Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 717-720 参照。

(82) Ludwig I. von Bayern. Der königliche Mäzen, S. 13 参照。

(83) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 729 参照。

- \*Rall Hans : Wittelsbacher Lebensbilder. Von Kaiser Ludwig bis zur Gegenwart. Führer durch die Münchner Fürstengräfte. (Hirmer Verlag 2011<sup>7</sup>)
- \*Schad, Martha : Bayerns Königinnen. (Piper Verlag 2014<sup>2</sup> (2008<sup>1</sup>))
- \*Schmid, Alois/Weigand, Katharina (Hrsg.) : Schauplätze der Geschichte in Bayern (Verlag C. H. Beck 2003)
- \*Staatliches Bauamt Regensburg (Hrsg.) : Walhalla. Amtlicher Führer (Bernhard Bosse Verlag 2014)
- \*Universitätsarchiv München (Hrsg.) : Ludwig-Maximilians-Universität München. (Verlag Lutz Garnies 1995)
- \*Wagner, Wilhelm J. : Bayern. Zwei Jahrhunderte bayerische Geschichte. (Magnus Verlag 2006)
- \*菊池良生『ドイツ三〇〇諸侯——千年の興亡——』河出書房新社 2017 年
- \*木野光司「マックス・ヨーゼフ一世とバイエルン王国」(関西学院大学文学部ドイツ文学研究室『KG ゲルマニスティク』第 13 号 2008 年 71-86 頁)
- \*木野光司「バイエルン王国初期のミュンヘン改造—1778 年から 1825 年までの業績を中心に—」(関西学院大学文学部ドイツ文学研究室『KG ゲルマニスティク』第 19・20 合併号 2016 年 71-92 頁)
- \*木野光司「ルートヴィヒ一世とバイエルン王国—第二代国王の少年時代から即位まで—」(関西学院大学人文学会『人文論究』第 67 巻第 1 号 2017 年 79-104 頁)
- \*木野光司「ルートヴィヒ一世のバイエルン王国統治—1825 年から 1848 年までの内政の考察—」(関西学院大学人文学会『人文論究』第 70 巻第 1 号 2020 年 169-192 頁)